

# 研究ノート：「楽典」の基礎指導の課題

阪井 恵・奥村 正子\*

## I. 問題意識

阪井は約7年にわたり、小学校教員養成課程の講義科目として、西洋音楽理論の基礎である「楽典」を講義してきた。そのうち6年は通学課程だけではなく、通信教育部のスクーリングをも担当している。奥村は短大音楽科で3年、保母・幼稚園教諭養成課程で8年、小学校教員養成課程で1年、実技と並行して「楽典」を講義してきた。この間に筆者らは、従来用いられてきた何種類かの「楽典」書、それを種本とした大学教科書類、ひいてはそれらをベースにした講義の進め方には、改善すべき問題があることを感じてきた。およそ的を射ない質問が、繰り返し出されるのはなぜか。注意深く説明しても、試験では誤答が目立つ結果になるのはなぜか。この問題を追究し、今後の講義内容を改善する努力は是非必要であろう。特に、学習過程の大半を、教科書・参考書による自習でこなしている通信教育課程の学生のためには、よりよい参考書やスクーリング授業を実現させたい。

楽典を学ぶということは：

- ① 音楽という現象を対象化して考えてみることである。

ところが音楽を専門としない学生の多くは、音楽という現象に、注意深く接したことがない。本来われわれの仕事は、「音楽という現象に注意を向ける」ことを促すところから始めるべきだと思う。しかし、通学課程で半期15コマ弱、通信教育部スクーリングにいたっては6コマ弱という時間数では、十分なことはできにくい。それにもかかわらず、多くの教科書類は、音楽を専門に志す学生と、音楽を専門としない学生とをあまり区別せずに書き起こされている。ここには大きな問題がある。音楽を専門としない学生、日ごろ音楽活動とは縁の薄い学生のためには、「音楽とは」という概念規定に始まり、「旋律とは」・「拍子とは」といった基本から、あるいは基本の部分自体を、音による実例を用いて丁寧に指導する必要がある。

楽典を学ぶということは、さらに：

- ② 音楽を対象化して得た理解を、音楽の実践に生かすためなのである。

ところがこの基本的かつ重大なことが、多くの「楽典」書からは読み取れない。また、教員採用試験用の問題集などは、このこと自体を全く考慮せず、音楽の実践のためには無意味な、「問題のための問題」を数多く載せている。このような問題と格闘するという、落とし穴にはまってしまう例は後を絶たない。本来は、一見単純なことから——たとえば音符や休符の長さ、のような——に、実は音楽表現の上での重大な意味があるということを、常に確かめながら学習すべきである。学習している内容が、音楽の実践にどう関わるかという視点と理解が、学習者には必要である。

## II. 本稿の手続き

上述の問題意識から筆者らは、現在入手し得る「楽典」書、楽典に関する大学教科書類

などを収集した。すべてを網羅できたわけではないが、収集したものは、すでにいくつかの類型に分かれ、大体の傾向を把握することはできたと考える。また、何か新しい視点を立てて最近刊行されたものについては、遺漏のないように心がけた。

これらの文献について、講義における学生の反応、学生からの質問事項、試験において誤答が頻出するポイントを特に意識しながら、その内容を、比較検討した。この過程で、多数の文献があるにもかかわらず、その多くに、比較的基本的な面で不備が見られることが明らかになった。また、多数を比較したことによって、より望ましい楽典書、更により望ましい講義の在り方についての展望を得た。

### III. 比較検討した文献一覧

本稿で比較検討した文献は以下の通りである。出版年順に、通し番号をつけた。

1. 石桁真礼生他：『楽典 理論と実習』，音楽之友社（1956）
2. 芥川也寸志：『音楽の基礎』，岩波新書（1971）
3. 西原弦志『三訂 楽譜のしくみ』，音楽之友社（1974）
4. 明星大学音楽研究室編：『音楽科教育Ⅰ』，明星大学（1977）
5. 平石博一：『やさしい楽典 クラシックからポピュラーまで』，中央アート出版社（1982）
6. 小山章三・繁下和雄：ジュニア音楽図書館『やさしい楽典』，音楽之友社（1982）
7. 菊池有恒：『楽典 音楽家を志す人のための 新版』，音楽之友社（1988）  
（1998にCD付きのものが出ている。）
8. 東川清一・平野昭：『音楽キーワード事典』，春秋社（1988）
9. 石黒一郎他：『音楽科教育』，創価大学出版会（1989）
10. 音楽教育研究会編：『幼児の音楽教育 音楽的表現の指導』（1990）
11. 澤野立二郎：『明解・実用楽典』，ドレミ楽譜出版社（1992）
12. ヤマハ音楽振興会：『新総合音楽講座1＜楽典＞』，ヤマハ・ミュージックメディア（1993）
13. 青島広志：『青島広志の楽典ノススメ』，音楽之友社（1993）
14. 桶谷弘美他：『やさしく学べる音楽理論——解説と演習（解答付き）』，音楽之友社（1994）
15. 東川清一：『誰も知らなかった楽典のはなし』，音楽之友社（1994）
16. 池辺晋一郎：『おもしろく学ぶ楽典』，音楽之友社（1995）
17. 佐々木邦雄：『ポピュラー音楽のための楽典』，音楽之友社（1995）
18. 近藤圭他：『音楽講座シリーズⅠ 明解新楽典 音楽を志す人のために』，音楽之友社（1995）
19. 鞍掛昭二他：『音楽の基礎 音楽理解はじめての一步』，音楽之友社（1997）
20. 竹井成美：『音楽を見る！』，音楽之友社（1997）
21. 供田武嘉津：『最新 学生の音楽通論』，音楽之友社（1997）
22. 山本裕之：『CDで学ぶ楽譜の楽しみ方』，ナツメ社（1997）
23. 山崎岩男他：『知ってる歌からエントリー 音楽がわかるソルフエージュ』，音楽之友社（1998）

24. デイヴ・スチュアート：『絶対わかる！楽譜の読み書き』，リットーミュージック（1998）

#### IV. 「楽典」の基礎指導に大切なこと

各文献を検討する過程で、「楽典」の基礎指導・学習のために、使いやすく分かりやすいものであるためには、次のようなポイントが大切ではないかと考えた。

##### 全体に関わること

- [A]読み手がどういう人なのか，を自覚して記述しているか。：読み手を想定することによって，具体例の挙げ方，詳しさの程度，語り口が変わってしかるべき。本の題名などの問題ではなく，全体にそのような配慮が欲しい。
- [B]索引が付いているか。：目次項目には現れない，細かいキーワードを索引から引けることは，便宜上重要。
- [C]実際に音を出して学習せよ，という注意をしているか。：当然過ぎて見過ごされがちだが，初学者にとって必須である。響きを聴覚的に確かめながらでなければ，「楽典」は学べない。最近 CD 付きのもの（文献番号 7・22）が出て，この点は改善の方向。
- [D]信頼できる事典等を参照・引用しているか。：たとえば，「リズム」「協和・不協和」のような語は，日常語として用いられているが，音楽用語としてはどうか。「新グローブ音楽事典」や『ハーヴァード音楽辞典』等，説得力の有る根拠を引いているべきである。

##### 内容に関わること

- [E]音・音名 ①音・音楽に用いる音についての説明をしているか。：「音楽」の概念規定の問題，音の物理的・音響学的説明は，多くの文献で不充分。多様な学生の疑問に答えきれていない。
- ②音名とは何か，適切に説明しているか。：「階名」という概念との関係において，重要な問題。
- [F]譜表 ①記譜の意義，記譜の歴史，様々の記譜法について説明しているか。：
- ② $\text{G}$  は  $\text{g}$ ， $\text{F}$  は  $\text{f}$  の五線上の位置であることを示しているか。：
- ③ $\text{G}$ ・ $\text{F}$  が「G」・「F」のデフォルメであることを説明しているか。：
- ④ $\text{G}$  譜表と  $\text{F}$  譜表を上下に組み，中央に  $\text{C}$  を固定した図があるか。：
- ⑤複数の音部記号の関係をわかりやすく提示しているか。：
- 上記②～⑤はひとまとまりのことだが，これだけ揃えて説明していないことがある。ある音（たとえば  $\text{a}$ ）は，ト音記号を用いた譜表でもヘ音記号を用いた譜表でも，ハ音記号を用いた譜表でも書き表せるが，このことは初学者にはなかなか理解できていない。また，音楽という鳴り響いて消えるものを視覚化する工夫として，「記譜法」を捉えなおすことは大切である。「ギターのカポタレ」もひとつの記譜法であることなど，親しんでいる例で考えてみるのが望ましい。
- [G]音符・休符 ①長さの比較において，全音符・全休符を基本の単位としているか。：

単に、四分音符が1拍、全音符は4拍という誤りはよく見られる。

- ②沈黙・休符の、音楽的な意味に触れているか。：休符は時には大音響より強い意味を持つ。あるフレーズ中の短い休符は、ためらいであったり意気込みであったりし得るし、オーケストラの全楽器による休符（沈黙）は極度の緊張を求めることも、安息をもたらすこともある。そのような認識を促すことが大切。

[H]リズム・拍 ①リズムの語義について、適切な説明があるか。

・拍子 ②拍・拍子の説明が、リズムとの絡みで適切か。

[I]音程 ①音程の語義について説明があるか。

②「完全」・「長短」音程について、適切に説明しているか。：

③重増・減あるいは大重増・減のような実際的でない音程についての扱いはどうか。：

①～③では、「協和・不協和」の意味を含めて、なぜ「完全」・「長短」の分類があるかを説明すべき。響きを確かめることが大切で、重以上の音程がほとんどあり得ないことは明記した方がよい。

[J]音階・調 ①ハ長調から他調の学習へ、適切に導いているか。：どんな高さの音からでも音階が作れる、ということから始めて、本来他調を発見的に学習すべき。機械的に#何個が何調、のように扱うと混乱を生ずる。

②短音階3種類の関係性について、説明しているか。：自然短音階を基本として、他の2種が出現する必然性を、音楽の例で示すべき。

③移動ド唱法・固定ド唱法に触れているか。：このことは教育上の大問題で、音名・階名と絡めて、触れたほうがよい。

[K]和音・和声 ①音階における各音の機能と和音を関係付けているか。：

②コードネームをよく説明しているか。：もはやコードネームを知らずには、市販の歌集や中・高教科書の歌も伴奏できない時代。

[L]楽語 ①通り一遍の、日本語定訳の提示に終わっていないか。：豊かなニュアンスの紹介こそ大切。

[M]その他 ①「絶対音感・相対音感」に触れているか。：

「絶対音感」がないのでコールユーブンゲンが歌えない、などという誤解があり、これも触れておきたいポイント。

②西洋音楽は様々な音楽様式のひとつであるという観点があるか。：

昨今は、音楽教育の理論と実践において、西洋音楽を相対化して考える時代である。楽典の諸問題も、身近な日本の音楽の例などと比較しつつ、捉えることが必要である。

われわれの問題意識と、多数の文献の比較検討を突き合わせるにより、以上のような諸点が「楽典」の基礎指導に大切である、という認識を得た。

検討した各文献について一覧表を作成し、ここで挙げた事項につき、筆者らの実践に参考になるかという観点から、秀逸なものには★、良いものには○を付けた。

文献番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
全体 に関 わる こと	[A]		★				★							○		★		○	○		○			★	
	[B]		○	○		○		○	○														★		
	[C]			○										○	○								○	★	
	[D]		○						★							★					○		○		
内 容 に 関 わ る こ と	[E]	①	★																	○					
		②	○						★							★				○					
	[F]	①	○						○					○	○					○		○			
		②	○	○			○		○				○	○				○	○	○					
		③	○			○			○	○		○		○	○				○		○				
		④							○	○	○	○	○		○	○		○		○		○	○		○
		⑤							★							★									
	[G]	①			○			○	○	○			○		○	○				○			○		○
		②	★	○		○																○			
	[H]	①	★						★		○			★		★				○					
		②	○						○					○		○				○					
	[I]	①	○				★		○							○				○					
		②	○				○		○							○				○				○	
		③				○								○		○									
	[J]	①			○			○		○				○	○	○				○			○		
		②	○	○				○	○			○		○	○	○				○		○	★		
		③			○			○						★							○	○	○		
	[K]	①			○							○			○					○					
		②			○	○					○	○		○	○			○		○			○	○	○
	[L]	①												★									○		
	[M]	①												○									★		
		②	★											○									○		

## V. 今後に向けて

行なった作業は、筆者らの今後の実践に向け、きわめて有益なものとなった。さらにより良い参考書の在り方への展望を得たことは、次のステップへの抱負につながる。本稿で挙げた諸点を考慮に入れる他、今後はCDあるいはCD-ROM付きで、この種の参考書を編集すると良いだろう。明星大学通信教育部の教科書（1977）も、特に自習の過程を助けるため、このことを含めて再検討すると良いのではないだろうか。